

* * * *

東部ヒマラヤの植物第2報(1971年), 第3報(1975年)に発表したマメ科植物の中で, 学名の訂正を必要とするものと, その後1975年4月から6月に British Museum (Natural History), Kew, Edinburgh および Paris の標本館でヒマラヤや中国のマメ科を研究した結果得られた新見解の一部とを併せて発表した。このうち日本にも分布するものはハタササゲ *Vigna unguiculata* (L.) Walp. var. *catjang* (Burm. f.) Ohashi, comb. nov. とタイワンカワラケツメイ *Cassia mimosoides* L. subsp. *lechenaultiana* (DC.) Ohashi, stat. nov. である。

熱帯に広く分布する *Cassia mimosoides* (狭義) とカワラケツメイの区別については東部ヒマラヤの植物第1報(1966年)で発表した。その後も *C. mimosoides* (広義) の変異に注意していたが, 小葉と花の大きさには相当の変異があり, 全分布域についてみると, 特にインドとヒマラヤの熱帯で著しいことが判った。小葉, 花および植物体の大きさについて一般的に言えば *C. mimosoides* (広義) の変異の幅の中で, カワラケツメイとタイワンカワラケツメイとはそれぞれ最小と最大の型である。

○高等植物分布資料(88) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (88)

○アズマシクナゲ *Rhododendron metternichii* var. *pentamerum* Maxim. 岩手県胆沢郡胆沢町にアズマシクナゲの自生地が確認された。栗駒, 焼石国定公園のほぼ中央部の岩手県側に真湯温泉があるがその北側に海拔 900 m ほどの祭時山(マツルベヤマ)がある。この祭時山の頂は一関市に入るが山裾は東南部が一関市, 北西部が胆沢町若柳(旧若柳村)になり, この胆沢町分の一角に当る国有林内で自生群落を昭和50年6月21日に確認した。

アズマシクナゲは本州中北部に分布し, その南限は秩父山地, そして北限は宮城県栗原郡花山村と記録されており, 今回の確認は約 25 km 北上し新自生北限地となる。自生地は海拔 650 m ほどの傾斜面で, 約 20 a ほどに群生し, 高木では 3 m ほどのものもみられる。

(鈴木 実, 岩手県立六原農場)

○再び台湾産 *Drymaria* について (常谷幸雄) Yukio JOTANI: Supplement notes on *Drymaria* from Taiwan

著者はさきに本誌第48巻第3号に, 台湾の各地に *Drymaria cordata* Willdenow var. *pacifica* Mizushima に当るものが産すること, 同時に同属のもので葉の幅が 25.0 mm をこえるもの, 茎に腺毛があるもの, 花柄に腺毛が多いもの, 萼片に腺毛が見られるものなどがあることを報じた。その後1973年7月に奄美徳之島及び沖縄本島で同属のものを採集し, 台湾産のものを含めて栽培して比較観察したところ, 台湾産

のあるものは徳之島及び沖縄本島産のものと形態的によく一致し、これらは互に同じものと認められた。1975年3月奄美大島で同属のものを採集し、さきのものと比較したところ、これもまた互に形態的によく一致することを知った。これらは共に水流に沿った湿地で採集したものであり、大形の葉を有し、幅が 30.0 mm をこえるものが見られたほか、花序の様子も互によく似ており、花蕾は基部から先に向って拡がり、急に先端でつぼまって概ね洋梨形をなし、長さは 2.5 mm 前後であって、*D. cordata* Willd. var. *pacifica* Mizus. の 4.0 mm 前後に達するのに比して短かいばかりでなく、形態的に相違があるほか、短かい腺毛が萼片の中肋部に密生し、時に側面にも少量ではあるが腺毛を生じていることがあり、小花柄及び花柄に短かい腺毛を密生し、苞葉の背面中肋部、茎の上部の節間にも腺毛を散生または少々密生することがある。これらを先に報じたタイ国産のものと比較すると、タイ国産のものでは一般に葉がより小形であり、これは乾燥した路傍で採集したものであるが、花蕾の形態、大きさなどはタイ国産のものも殆んど同じであり、只タイ国産のものでは萼片の中肋部に腺毛を密生するほか、両側面もかなり多くの腺毛を生じ、他の部分にも一般に腺毛が多く見られるが、奄美大島、徳之島、沖縄本島及び台湾産のものでは、一般に萼片の両側面には腺毛を生じないか、或はこれを僅かに生ずる程度である。このような形態的な相違は *D. cordata* Willd. と見られるものにあっても知られており、*D. cordata* Willd. var. *pacifica* Mizus. は萼片に全く腺毛のない型のものである。これらの点から見てここに取扱った奄美大島、徳之島、沖縄本島及び台湾産のものは、タイ国産のものと同じ種に属するものと考えられ、水島正美博士に従い *D. diandra* Blume として取扱うことにする。さきに述べた伊豆八丈島、青ヶ島産のものと、奄美大島、徳之島、沖縄本島産のものとは形態的にはっきりと区別せられ、わが国にあっては八丈島、青ヶ島のほか小笠原諸島（硫黄諸島を含む）に産する *D. cordata* Willd. に属するものと、奄美大島以南の南西諸島及び沖縄諸島に産する *D. diandra* Bl. に属すると見られるものに区別することが妥当であると考えられる。

しかし台湾にあって各地に産するものを互に比較して見ると、両者の中間型と思われるものが現れてくる。このようなことはマレー半島にあっても見られ、ここでも両者が入り込んでいるが、1974年3月マレーシアの Kuala Lumpur に近い Bukit Fraser で観察したところでは、全く同じような事実遭遇した。わが国のように両者が互に隔離して分布しているところでは、それらの区別は容易であるが、同一の地域に両者が分布しているところでは、互に交雑が行われるためと考えられ、シンガポール植物園で見せてもらったマレー半島各地産の多数の標本からも、このようなことが推測せられた。従来東南アジア方面で *D. cordata* Willd. として文献に現われているものは、必ずしも同じものを指していないように思われる。今後なお多数の資料により検討する機会が得られれば幸である。

(東京農業大学)